

## Theodore Dreiser : *The Bulwark*への道 (1)

本 間 喜 美 子

### 目 次

- 
- I 序論
    - 1. Theodore Dreiser の自然主義
    - 2. *The Bulwark* の意義
  - II *Sister Carrie* における自然主義
    - 1. *Sister Carrie* 出版前後
    - 2. 自然主義小説
    - 3. 反自然主義的傾向
  - III *Jennie Gerhardt* : 決定論の分裂
    - 1. *Jennie Gerhardt* 出版前後
    - 2. 幻滅と開眼
    - 3. 決定論の展開
    - 4. 絶対者の存在
- 

### I 序 論

#### 1. Theodore Dreiser の自然主義

英語では“naturalism”, 仏語で“naturalisme”, そして日本語で「自然主義」と呼ばれる一つの概念を定義するのは非常に骨の折れる仕事であるが, 明確に言える事は他に例を見ない程自然主義は18世紀, 19世紀の時代と時代精神に密接に係わる主義, 主張である。

19世紀の前半に自然科学が異常に発達したが, 自然主義もその影響下に生まれ出たものであり, 科学を父とし, 絶望を母として生まれ育った主義とも言える。自然科学より理論と方法論とを借用しているが故に科学を自然主義の父と呼びえるが, しかれば何故に絶望を母と呼ぶかと言えば, 18世紀を風靡した啓蒙思想が19世紀に至りその楽天的な態度をもはや維持出来ずに矛盾が表面化してきたためである。信仰の自由を求め, 科学的合理的主義を信奉し, 社会と個人の改革と改良とを確信し, 科学と技術の発達が歴史に現れるあらゆる不合理と悪とを解決すると信じる進歩の思想を鼓吹した啓蒙思想も皮肉な事に歴史そのものによって裏切られ, 19世紀に崩壊してみると, その夢が大きく, 期待が強かっただけに失望と挫折感とは深いものがあった。そこに冷酷な宇宙においては人間は取るに足りぬ存在であり, 自然に救いはなく, 進歩も発展も期待出来ないとする自然主義の悲観的な思想が芽生えてくるのである。

自然主義はフランスを中心として発達したが, フランスの芸術家のなかでも特に Emile Zola が1867年 *Thérèse Raquin* の序文で自然主義を鼓吹した。さらに科学的方法と正確な資料を駆使

し、遺伝における医学書の影響の下に、フランス社会を象徴していると思われる一家族の第二帝政下の歴史を綴った Rougon-Macquart 双書を書きあげて自然主義運動の旗手となった。

自然主義がアメリカの文学に影響を与えたのは19世紀の最後の十年間においてであるが、この影響の与え方、移植の仕方が以前の主義や主張がアメリカに影響を与えたのとは異なり、英国を経ずにフランスから直接アメリカへ入ってきた。当時のアメリカ国民の目には保守的な英国こそ信頼の出来る相手であり、フランスは危険で不道德な油断のならない国と映っていた。このようにフランスは馴みのない国であり、その上頹廢的で絶望的な自然主義が、辺境を開拓し、富を獲得して成功しようとする活動的な国に何故移植されたかが問題となる。Rod W. Horton と Herbert W. Edwards は *Backgrounds of American Literary Thought* において、自然主義が移植されたのはアメリカの精神的風土に流れている Calvinism と精神の不毛性に起因すると指摘している。理解を越える存在としての神と原罪の教義を持つ Calvinism は宇宙の予定された力に対して人間がいかに脆いものであるかを強調し、啓蒙思想家が理性により予知出来る神を主張したとて、原罪というアメリカの風土に深くしみこんでいる罪悪感を取り除く事は出来なかった。他方19世紀後半には資本家が私有財産を蓄積し、一般の市民はその犠牲となり不安と貧困の中で呻いていたのがアメリカの実状であった。歴史的には Calvinism により、時期的には資本家の搾取と庶民の苦境により、自然主義がアメリカの風土に根を下す土壌が出来ていたのである。

Horton と Edwards は文学における自然主義は倫理的に、精神的に絶対零度なので、いかなる作品も作家もそれを達成出来ない。特にアメリカにおいては Zola 以上に完全な自然主義的観点に達した作家はいなかったと指摘している<sup>1)</sup>が、Theodore Dreiser も例外ではなく、その自然主義も終始一貫したものではなかったのである。

Charles Child Walcutt は Dreiser の自然主義を四段階に区分し、第四段階に至った Dreiser の自然主義はもはや自然主義とは呼べないと主張し、且つ初期の Dreiser がその調子を極端に変えることなくいかに容易に第四段階に至ることが出来るかを指摘している。

Thus the fourth stage of Dreiser's naturalism is not naturalism, after all, and it is indeed most instructive to see how easily the style, the method, and the attitudes of the early Dreiser are entirely converted in these final novels to the uses of Authority and Spirit. Having brooded long and sadly over the materialist's world, he turns away from it at the end without greatly changing his tone.<sup>2)</sup>

このように Dreiser には初期の小説より自然主義小説の理論と矛盾する神秘的な要素に魅惑される傾向があり、*The Bulwark* に到り一つの到達点を示している<sup>3)</sup>ので、この研究においては主に Dreiser の小説の中に神秘的な或は反自然主義的な要素がいかに散見し、それが *The Bulwark* といかなる関わりを持っているかを考察する。

## 2. *The Bulwark* の意義

*The Bulwark* の主人公 Solon Barnes は敬虔な Quaker 教徒であるが、激動する社会の中にあり、信仰と世俗の価値とのあまりにも深い差違が引起こす緊張に巻込まれ、その緊迫感ゆえに次代を背負う子供達を厳しく訓育するが、Solon のこの厳しさが原因となり子供達との疎外、特に次男 Stewart の殺人幫助罪による逮捕とそれに続く Stewart の自殺に直面し、己れの信

仰が根底より崩れ落ちる危機に直面した時に、その事件の以前には認識しなかった、又認識出来なかったすべての生き物の背後に遍在する創造主の愛を知るのである。

Stewartの事件に衝激を受け最愛の妻 Benecia が亡くなった後に、失意の Solon が美しい庭園を散策中、ふとエメラルド色の蠅に注目し、この取るに足りぬ小さな蠅さえも身を守る武器を持たぬ花の蕾を食べて生きているのに思いをはせ、蠅と花の蕾みとではどちらが生き残るように意図されているのかと心に問うているうちに蠅や花の蕾みのみならず、自然界のすべての生き物、自然界の構造そのものにまで思索をすすめ、その背後にこれらの自然界の現象や変化を超越した創造主の存在と意図とを見出し、Solon を襲った悲しみにもめげず神に対する信仰を失うまいと決意する。

Then, after bending down and examining a blade of grass here, a climbing vine there, a minute flower, lovely and yet as inexplicable as his green fly, he turned in a kind of religious awe and wonder. Surely there must be a Creative Divinity, and so a purpose, behind all of this variety and beauty and tragedy of life. For see how tragedy had descended upon him, and still he had faith, and would have.<sup>3)</sup>

Dreiser はアメリカ自然主義小説の代表的な作家の一人であり、Emile Zola や Herbert Spencer 等を愛読し、環境や状況の影響を受ける気質や有機体としての人間を描き、人生に目的も意義も認めず、ただ衝動に駆立てられてあてもなく彷徨うだけの人間の生、美しき者も古い、栄える者もやがて滅びる生々流転、力ある者が弱き者を抑圧する弱肉強食の世界を描いてきたが、*The Bulwark* に至り、簡潔な文体でSolon の苦悩を経ての内面の勝利を示し、Dreiser 自身が悲観的な見方の背後に目的と意義とを見出したのではないかと思われる。

## II *Sister Carrie* における自然主義

### 1. *Sister Carrie* 出版前後

Toledo の新聞社で働いていた頃に知りあい、親しい間柄であった Arthur Henry の招きで Dreiser 夫妻は1899年、Ohio 州 Maumee にあった Henry の家で一夏を過した。Maumee河が悠然と流れる Maumee はかつて港町として栄えたが、Dreiser が訪れた頃には寂れてしまい、かつての賑いはないが、静かでのどかな、色とりどりの花が咲き乱れる田舎町であった。この Maumee が、人生の戦いにいささか疲れ気味であった Dreiser には快適な場所となった。Henry と毎夕文学を語りあい、Henry の勧めで “The Shining Slave Makers,” “Nigger Jeff,” “Bucher,” “Rogaum’s Door,” “When the Old Century Was New,” “The World and the Bubble” 等の短編小説を書き上げ、出版社にも受け入れられた。

9月に New York へ帰ってからも Dreiser は意欲的に仕事をすすめた。Henry も短編小説では満足出来なくなり、長編小説 *A Princess of Arcady* を書き始め、Dreiser と競ったほうが相互に良い結果をもたらすであろうとの考えから Dreiser にも何か長編小説を書くように勧めた。Dreiser はふと一枚の黄色い紙に *Sister Carrie* とこれから書き始めようとしている小説の表題を書いたが、Carrie とはいかなる気質の人物か、いかなる運命を背負っているか等全く不明であった。しかし Dreiser の姉達が解答を与えてくれたのである。特に二番目の姉 Emma は建築技師の mistress であったが、<sup>4)</sup>レストランの支配人 L. A. Hopkins と駆落した。

その際支配人はレストランの金を着服したが、後に着服した金の大部分を雇主に返済した。

Emma の事件は *Sister Carrie* に筋を与える事になったが、Dreiser は Emma のみをモデルにしたわけではなく、はじめて大都市 Chicago に到着した時の感激、その感激をも吹飛ばすような職捜しの苦痛、僅かばかりの賃金で働く長い長い一日等、Dreiser 自身の経験を細部にわたって盛込んでいる。Dreiser は一時 *Sister Carrie* を *The Flesh and the Spirit* という表題に変更しようとしたが、これなぞは Dreiser 自身の分裂した複雑な精神状態を暗示する良い例である。<sup>5)</sup> *Sister Carrie* は Dreiser の姉達の物語のみでなく Dreiser の内面の世界をも反映しているのである。

*Sister Carrie* を完成した時に Dreiser はどここの出版社に原稿を持込むべきか迷っていたが、Harper & Brothers 社から原稿を拒否された後、自然主義の小説、Frank Norris の *McTeague* を出版した Doubleday Page & Company に原稿を提出した。

Doubleday Page 社の原稿の下読みをしていた Norris は Dreiser の *Sister Carrie* を認め、Norris の薦めもあって Doubleday Page 社は出版を契約した。しかし Doubleday 社長の *Sister Carrie* は売れないという判断と Doubleday 夫人の道徳上好ましい小説ではないという判断から、Doubleday Page 社は契約を破棄しようとしたが、Dreiser はそれを退け強引に出版させた。しかし結果は Dreiser の期待もむなしく惨憺たるものでほとんど売れることなく、千部出版したうち百部ほど Norris が批評家に送ったにすぎず、その批評も芳しいものではなかった。

## 2. 自 然 主 義 小 説

*Sister Carrie* は Dreiser の作品のうち最も自然主義小説と呼ぶにふさわしい作品で<sup>6)</sup>、主人公 Carrie を通して制御することも、乗り越えることも出来ない衝動に振りまわされる人間像を描き、Hurstwood を通して人力を越えた運命に支配される人間を描いている。自然主義小説の代表的作品だけに、この小説には自然を越えた要素はほとんどなく、むしろ神秘的な要素をやや意識的に放棄した場面より始まっている。

*The Bulwark* において Solon は自然の光景を眺め、自然の中であって思索をすすめるうちに超自然の存在であり、且つ自然の創造主である神と出会ったように<sup>7)</sup>、Dreiser の作品においては自然描写の中に神秘的な要素を挿入している場面が多い。ところが *Sister Carrie* においては Carrie が、少くとも大都市よりは自然にふれる機会に恵まれ、Dreiser 自身が Chicago へ旅立つ直前まで母親と住んでいた森と湖に囲まれた Warsaw<sup>8)</sup> をモデルにしていると思われる Columbia City を出発する場面より始まる。

出発する以前、即ち家族の者から Caroline, Carrie と呼ばれ潑刺とした活発な娘だったらしいが、Carrie はどのような教育を受けたのか、父や母はいかなる人物か、兄弟姉妹は幾人か等ほとんど言及されず、Chicago からあまり遠くない、Chicago 行の汽車が毎日通る Columbia City から Chicago の West Van Buren Street に住んでいる姉を頼って行こうとしていると指摘される。父も母も健在で、父は実直な働き者であり、母は平凡だが優しい女性ではないかと暗示される。このような簡単な履歴以外幾百ページにもわたるこの本には Carrie の幼年時代、青春時代の描写はほとんどない。Dreiser が Carrie の前身にあまり触れなかったのは Carrie が育った環境、背景、時代を省略し、削除する事によりこの環境と訣別して Chicago という大都市へ、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへ旅立つのだとの印象を強めている。

故郷を放棄した Carrie、それは Dreiser のほとんどすべての小説において安らぎを与える源<sup>9)</sup>

となっている自然との絆を断ち切るのを意味するのであるが、この Carrie がたどる道を Dreiser は細部描写を幾重にも重ねながら丹念に描いてゆく。Chicago は Columbia City とは対照的に人間の造り出した都市で、文明の利器である電柱が林立し、電灯がきらめき、人工的に作り出す集いであるバーやサロンが密集する都市である。地位も富もなく、それに代る特別な才能もない Carrie は人生の快楽に鋭敏に反応する感受性と満たされれば満たされる程強烈となる欲望、それに十八才という若さゆえに抵抗なく他の人間に同化する力とを武器として大都市へ乗込む。

この Carrie の憧れ、欲望を Chicago がもはや満たしきれなくなると Dreiser は場面を Chicago より大きく、それだけに生存競争の激しい New York へ移している。Carrie がこの New York の可能性を知らない間は Hurstwood との生活も安定し楽しいものであったが、Mrs. Vance を知り New York の持つ可能性、特に富が提供する快楽に目覚めるやいなや Hurstwood との生活もむなしいものに思われてくる。

このように Carrie の一層多くの物を、一層豊かな優れたものを求めようとする欲求は、小説の前半においては激しくなるばかりであったが、女優としての名声と地位とを獲得した後半においては質的にやや異なるようになる。その契機となったのが Mrs. Vance の従弟の Ames である。

Ames<sup>10)</sup> は Drouet や Hurstwood より豊かな教養を身につけた紳士で、Carrie が今だ到達出来ない地点に立つがゆえに Carrie には魅力ある存在となっている。Ames は、Carrie にとって絶対的なものであり、又この上なく尊いと思われる富と富を持てる人々をさえ批判し、Carrie と著しく異った価値観を示す。

This man was far ahead of her. He seemed wiser than Hurstwood, saner and brighter than Drouet. He seemed innocent and clean, and she thought that he was exceedingly pleasant. She noticed, also, that his interest in her was a far-off one. She was not in his life, and yet now, as he spoke of these things, they appealed to her.

"I shouldn't care to be rich," he told her, as the dinner proceeded and the supply of food warmed up his sympathies; "not rich enough to spend my money this way."<sup>11)</sup>

Ames は衝動に駆立てられる Carrie を批判し、それに打勝つ力を与えうる可能性を秘めていたのであるが、この小説においてはその可能性は実現されず、Ames の出現は Carrie の欲望を方向転換、即ち美しい衣裳とか豪華な邸宅等量的な物から知識や教養等形のない質的な物を求めるよう転換させたにすぎず、Carrie は内なる衝動に支配されていて解放されることはない。

Oh, Carrie, Carrie ! Oh, blind strivings of the human heart ! Onward, onward, it saith, and where beauty leads, there it follows. Whether it be the tinkle of a lone sheep bell o'er some quiet landscape, or the glimmer of beauty in sylvan places, or the show of soul in some passing eye, the heart knows and makes answer, following. It is when the feet weary and hope seems vain that the heartaches and the longings arise. Know, then, that for you is neither surfeit nor content. In your rocking-chair, by your window dreaming,

shall you long, alone. In your rocking-chair, by your window, shall you dream such happiness as you may never feel (p. 557).

Carrie は都市のものである物質主義の価値を受入れ、富と地位とを獲得したが、その到達した地点で満足出来ずに不満を吐いている。Dreiser はこの Carrie よりさらに徹底した物質主義者の Drouet を登場させ、精神に係るものを殆ど持たぬ人間を描いている。Drouet の生立ちは Carrie より更に不明で、Carrie に渡した名刺で full name は Chas. H. Drouet (p. 7) で、父側がフランス系である以外殆ど霧に包まれている。

Drouet は Carrie を Chicago へ導き、その魅力と歓楽とを教えたように Carrie を常に新しい世界へと導いてゆく。Carrie の運命を決める事となった劇場へ最初に案内したのも Drouet であり、単なる観客から劇場の内部へ一歩入り、“Under the Gaslight” という素人芝居の heroine を演ずるよう Carrie を励まし、Carrie に女優としての才能があると確信させるが、小説の後半において輝かしい新世界へ Carrie を導く先導者の役割は Ames に引き継がれている。

Carrie の Drouet に対する評価は Carrie が貧しく都会の歓楽を知らなかった頃には絶対的なものであり、Drouet に話しかけられたのに多少の自信と希望とを見出している。しかし Carrie が Drouet と生活するようになり飢えることも、工場で長時間苦痛に耐えながら働く必要もなくなり、Hurstwood が登場すると Carrie の比較分析が始まる。Drouet は Carrie にとり絶対的な存在から Hurstwood と較べると金ぴかでまやかしの人間となり、Ames に較べれば軽卒で取るに足りぬ人間となる。しかし Dreiser は Drouet を常に変ることのない人間、内面的な精神に係るものをほとんど持たない人間として一貫して外面より捕えて描写している。

Lest this order of individual should permanently pass, let me put down some of the most striking characteristics of his most successful manner and method. Good clothes, of course, were the first essential, the things without which he was nothing. A strong physical nature, actuated by a keen desire for the feminine, was the next (p. 4).

Drouet はこの小説の構成上重要な人物で<sup>12)</sup>、Carrie の比較対照の基準となり、成功の度合を計る秤となっている。Carrie が女優として成功した後に彼女に会いに来た Drouet の描写は Chicago 行の列車内で始めて登場した時とあまり変わっていない。変わったのは Carrie の Drouet に対する評価のみである点を Dreiser は如実に示している。

“Well, well!” said Drouet. “I do swear! Why, how are you? I knew that was you the moment I saw you.”

Carrie fell back a pace, expecting a most embarrassing conversation.

“Aren’t you going to shake hands with me? Well, you’re a dandy! That’s all right, shake hands.”

Carrie put out her hands, smiling, if for nothing more than the man’s exuberant good-nature. Though older, he was but slightly changed. The same fine clothes, the same stocky body, the same rosy countenance (p. 526).

## 3. 反自然主義的傾向

Dreiser は Carrie と Drouet を通して欲望と衝動に支配される人間像を追求した。次に Hurstwood の苦闘と破滅を追跡する事によって人間のこの宿命はいかにもがき苦しんだとて逃れうる可能性はないと主張する。他方このような Dreiser の悲観論にもかかわらず、Hurstwood の破滅を通して逆説的に人間の尊厳を重んじ精神の勝利へと導く傾向、即ち Solon の達した心境に向う傾向を示している。

Dreiser は Hurstwood が Carrie に魅惑されたのは Carrie の持つ magnetism に引きつけられたからであり<sup>13)</sup>、破滅したのは運命に微笑まれなかったからであるという自然主義作家らしい明解な解答を与えつつも、Hurstwood を Carrie や Drouet とは幾分異なった人間として描いている。Hurstwood には人生に夢を求めようとするやや浪漫的な傾向、特に自然に対する憧れと過去をなつかしむ気質を与えている。Hurstwood のこの気質は家庭においては社会的に向上することのみ意欲を燃やす利己的な妻や子供に囲まれ満たされない。それが故に Hurstwood は Carrie のうちに Drouet も Ames も発見出来なかった牧歌的な雰囲気を見出したのである。Hurstwood もかつては存分に味わったであろう故郷の自然の美しさ、静けさをその姿に今だ宿している Carrie に魅惑されるのである。

Carrie was certainly better than this man, as she was superior, mentally, to Drouet. She came fresh from the air of the village, the light of the country still in her eye. Here was neither guile nor rapacity. There were slight inherited traits of both in her, but they were rudimentary. She was too full of wonder and desire to be greedy. She still looked about her upon the great maze of the city without understanding. Hurstwood felt the bloom and the youth. He picked her as he would the fresh fruit of a tree. He felt as fresh in her presence as one who is taken out of the first cool breath of spring (p. 136).

Dreiser は Carrie を慕って待つ Hurstwood の周囲にもやさしい牧歌的な雰囲気を漂わせる。

The next afternoon he was in the pretty little park by one, and had found a rustic bench beneath the green leaves of a lilac bush which bordered one of the paths. It was at that season of the year when the fulness of spring had not yet worn quite away. At a little pond near by some cleanly dressed children were sailing white canvas boats. In the shade of a green pagoda a bebuttoned officer of the law was resting, his arms folded, his club at rest in his belt. An old gardener was upon the lawn, with a pair of pruning shears, looking after some brushes. High overhead was the clear blue shy of the new summer, and in the thickness of the shiny green leaves of the trees hopped and twittered the busy sparrows (p. 161).

しかし故郷を捨て、現在に生きんとしている Carrie のうちに自然の与える安らぎをいかに求めたところで得られるはずもなく二人の愛は転落の方向へ向う。

Hurstwood が Carrie に魅せられた理由の一つに Carrie の若さに対する羨望と憧憬があげられる。Carrie に出会った時に Hurstwood は四十才という年齢を忘れ、何時、何処でも好きな女性に求婚出来た自由で潑刺とした二十才の青年に戻ったような気分になる。その結果 “the first grade below the luxuriously rich” (p. 50) に属する人間が犯してはならないタブーである世間体を考えずに行動し、McVickar’s 劇場で Carrie と観劇している姿やドライブをしている場面を目撃され、冷酷で打算的な妻の耳に入り離婚訴訟にまで追いこまれる。

都市が滅ぼした自然、時間が奪った若さに対する憧れのゆえに Carrie に近づいた Hurstwood は失われた時を取り戻そうと苦闘する。このように現在と過去を絶えず比較し、未来へ向かわず、過去へと向う Hurstwood の傾向が Dreiser の化学用語で “katastates” (p. 362)<sup>14)</sup> という毒を作り出し、この毒が Hurstwood を徐々に蝕んでゆく。Fitzgerald and Moy の金を着服したかどで探偵に追われ、New York へ逃れて二流のサロンを経営するが、この店もうまくゆかず投資した金を失ったにすぎない。生活が苦しくなればなる程過去が尊く、過去の栄光を夢見ては自らを慰め、醒めては落胆している。

In the morning he was aroused out of a pleasant dream by several men stirring about in the cold, cheerless room. He had been back in Chicago in fancy, in his own comfortable home. Jessica had been arranging to go somewhere, and he had been talking with her about it. This was so clear in his mind, that he was startled now by the contrast of this room. He raised his head, and the cold, bitter reality jarred him into wakefulness (p. 461).

Hurstwood は精神的にも肉体的にも衰えてゆき遂に運命の犠牲者であると主張するようになるが、戦いをたやすく放棄したわけではない。時折 Carrie の非難の言葉と戦えと命ずる内からの声に促され奮起する。“I can get something. I’m not down yet.” (p. 430) という声に促され市街電車のスト破りとして雇われるが散散なめにあい、Carrie の居る家に帰るが、その Carrie も Hurstwood に見切りをつけて去ってしまった後にはどんな卑しい仕事もせねばならなくなる。その仕事もなくなれば物乞いとなり、乞うても与える者がなくなった時に Hurstwood は自らの命を断ち悲惨な生涯を終える。<sup>15)</sup>

運命に見放され負戦をしている人間がいかに滅びていったかを Dreiser は感傷を交えず冷静な目で観察している。しかし Dreiser は Hurstwood を運命に弄ばれる頼りない存在としてのみ描いているのではない。Hurstwood は最後に自らの手で運命を終結させたが、この点においてのみ人間は主体者であり、行為者でありえる。ここに Dreiser は運命という冷酷な力に打撃を与えるには自らの手で自らの命を断つ外に道はないとする厳しく悲観的な見方を表明している。

Dreiser は Hurstwood を破滅させる事により人生は無意味であり、自然に救いはなく、宇宙は目的を持たぬと強調しながら自らの手で命を断った Hurstwood に弱者の最後の抵抗と主体性を見ている。他方運命に微笑まれた Carrie はただ波のように押寄せる欲望に駆立てられ、なすすべもなく運命に弄れて主体性という点から見れば力なき敗者となっている。この Carrie の虚ろな満されぬ姿<sup>16)</sup>を通して人生に目的はなく、人力を越えた力がすべてを決定すると知りつつ、それでもなお人生に目的と意義とを求めて揺れ動く Dreiser 自身を表明しているように思われ



る。

### Ⅲ Jennie Gerhardt : 決定論の分裂

#### 1. Jennie Gerhardt 出版前後

Dreiser は1900年に *Sister Carrie* を出版して以来1911年に *Jennie Gerhardt* を出版する迄のおよそ十年間ほとんど小説を書かずに沈黙を守っていた。これは *Sister Carrie* の不評により Dreiser がいかに衝激を受けたかを物語っている。精神的には不眠症を伴う憂鬱症となり、経済的には無一文となってあたかも Hurstwood のように New York を彷徨うていたが、長兄 Paul の援助がなかったなら Dreiser の身心は完全に蝕まれていたであろう。十分に休養をとり再び活動出来る力を蓄えた Dreiser ではあるが、以後十年間は「お上品な伝統」を尊ぶ世間と妥協することになる。Dreiser は世間と妥協しながらも、文学界に彼の作品が理解される土壌の形成されるのを待っていたのである。幸い1911年に期が熟したので *Jennie Gerhardt* の著作に本格的に取掛かり、出版した。

1905年に Dreiser は真実の生を見たま書きたいとの願を抑えつつ、雑誌の編集にあたる事になり、*Smith's Magazine* を編集した翌年に *Broadway Magazine* を編集し、1907年には Butterick Publishing Company へ移った。Butterick 社では *Delineator*, *Designer*, *New Idea Woman's Magazine* の編集に関係して社会的にも重要な地位を占めるようになり、経済的にも豊かになった。Dreiser は編集者としても並々ならぬ才能を示し、雑誌の売上げも好評であったが、記事の選択にあたり思想を重んじて取上げようとする Dreiser の方針と売上げを重んじる Butterick 社の編集方針が相容れなくなったが、Butterick 社を去らず、名を伏せ *Bohemian* という雑誌を独力で出版したが短期間で経営にゆきづまってしまった。丁度この頃に Dreiser を理解しえない妻 Sallie との間は救いようがない程になり、Dreiser は Butterick 社関係の人の娘であった Thelma Cudlipp と恋愛事件を起こして遂に Butterick 社を去った。

Dreiser は一時世間と妥協したのであるが、妥協しつつも雑誌編集の方針において真実なるものをありのままに書かんとする主張を貫ぬこうと努力している。この間文学界には漸う Dreiser の真価を理解出来る兆が現れ<sup>17)</sup>、1907年には Ben W. Dodge & Company より *Sister Carrie* の再版を世に問うたが、今回は宣伝もゆきとどき、批評もひどいものではなかったので売行も満足出来るものであった。Dreiser はこの十年間というもの雑誌編集に心を奪われ、新しい作品を書上げる余裕がなかったのであるが、Butterick 社を退社して時間的にも余裕が出来、文学界の動向により精神的にも自信をもって *Jennie Gerhardt* を完成したのである<sup>18)</sup>。*Jennie Gerhardt* の批評も悪いものではなく、H. L. Menken 等は “the best American novel ever done, with the one exception of Huckleberry Finn” と絶賛している。

#### 2. 幻滅と開眼

Dreiser の二番目の小説、*Jennie Gerhardt* は女主人公 Jennie の父 William Gerhardt の幻滅と開眼という点で Solon の経験に非常に似てをり、*The Bulwark* へ一步接近した作品である。Quaker 教と Luther 教の違いはあるが、Gerhardt は Solon のように敬虔な信徒であり、信念に従い厳しい生活を送っている。神の御言葉を絶対的真理として受取り、六人の子供達を厳しく訓育するが、一家を救うためとはいえ、皮肉にも愛娘 Jennie が Etta のように信仰の道にはずれた行いにより裏切り者となる。他の子供達は裏切りはしないが利己的で冷たく真の

キリスト者となる資格がない。

子供達が成長するにつれて、Gerhardt の懷疑は深かまるばかりで、Gerhardt の信条に照した場合善であるはずの Jennie 以外の子供達は Jennie の犠牲によって成長したにもかかわらず Jennie の身分を恥じ、一家の貧窮を恥じて離散してゆく。<sup>19)</sup> 他方信仰の上から悪となるはずの Jennie は真の愛を持つ唯一の子供である。そこで Gerhardt の心中において何が善であり、何が悪であるが、善悪を定めるべき信条が絶対的なものでなくなり動揺する。

Yet he continued to hold some strongly dogmatic convictions. He believed there was a hell, and that people who sinned would go there. How about Mrs. Gerhardt? How about Jennie? He believed that both had sinned woefully. He believed that the just would be rewarded in heaven. But who were the just? Mrs. Gerhardt had not had a bad heart. Jennie was the soul of generosity. Take his son Sebastian. Sebastian was a good boy, but he was cold, and certainly indifferent to his father. Take Martha—she was ambitious, but obviously selfish.<sup>20)</sup>

*Jennie Gerhardt* には *The Bulwark* の主題となる時代と宗教との関係が断片的に表われてくる。Dreiser は二十世紀初頭を物質万能の時代であり、精神的な力は殆ど無に等しい時代であると捕え、そのような時代にあり、精神の力によってのみ生きんとしている Gerhardt の孤高の精神をかならずしも非難していない。Gerhardt は一家の精神的支柱で、その宗教は狂信的なものでなく、Dreiser は Solon が高い次元に飛躍した際に用いた言葉 “the Creative Impulse”<sup>21)</sup> や “a Creative Divinity”<sup>22)</sup> を想起する “the Divine Will” という言葉を用いて説明している。

Religion was a consuming thing with him. God was a person, a dominant reality. Religion was not a thing of mere words or of interesting ideas to be listened to on Sunday, but a strong, vital expression of the Divine Will handed down from a time when men were in personal contact with God. Its fulfilment was a matter of joy and salvation with him, the one consolation of a creature sent to wander in a vale whose explanation was not here but in heaven (p. 123).

Stewart の死が Solon にもたらした信仰が根底より崩壊する程の危機を Gerhardt は経験していないが、Jennie が信仰の道を踏外し、私生児 Vesta を宿した事に、たとえ信念に従い厳しく訓育した子供でも期待にそむく可能性のあるのを知った。キリスト者として許されない罪を犯すとは Jennie や他の子供達を育てた時には想像もしなかったが、孫娘 Vesta の訓育にあたっては将来 Jennie やように失望と悲しみとをもたらすかもしれない可能性を宿しているのを知りつつも Vesta に愛を注いでいる。<sup>23)</sup>

Gerhardt の懷疑が解決されたか否かを Dreiser はこの小説では示さず、善悪を狭いドグマによって決定する過ちを指摘するにすぎない。Gerhardt はその過ちを犯したのを認め、裏切った Jennie が信仰においても、心情においても一番近い子供であったのを知り、Jennie と和解し、許しを乞いながら静かな死を迎える。

“You’re a good girl, Jennie,” he said brokenly. “You’ve been good to me. I’ve been hard and cross, but I’m an old man. You forgive me, don’t you?”

“Oh, papa, please don’t,” she pleaded, tears welling from her eyes. “You know I have nothing to forgive. I’m the one who has been all wrong.”

“No, no,” he said; and he sank down on her knees beside him and cried. He put his thin, yellow hand on her hair. “There, there,” he said brokenly, “I understand a lot of things I didn’t. We get wiser as we get older.” (p. 345)

### 3. 決定論の展開

*Sister Carrie* において Dreiser は決定論を展開した。*Jennie Gerhardt* においても将棋のこまのように社会環境に弄ばれる人間を描き決定論を展開しているが、*Sister Carrie* と異なりこの作品においては Dreiser の社会というものに対する関心が深まり、やがて *An American Tragedy* へと展開してゆく問題が姿を現わし始める。Dreiser は社会を捕える場合には単純に富豪階層と貧民階層に二分するにすぎないが、その区分は峻烈で一方の世界に他方の世界の人間が入るのを認めていない。この区分の厳しさを鳥は海で、魚は陸で生きられないようにそれぞれ生物には生活圏があり、その生活圏の外では生存出来ない譬を用いて説明している。

From the parasites of the flowers to the monsters of the jungle and the deep we see clearly the circumscribed nature of their movements—the emphatic manner in which life has limited them to a sphere; and we are content to note the ludicrous and invariably fatal results which attend any effort on their part to depart from their environment (p. 238).

この説に従えば貧しい Jennie と金持の家に生まれ育った Lester は生活圏が異なるので、二人がいかに結婚を望んだとて不可能であり、小説はこの仮説を証明するかのごとく Jennie と Lester は別れてそれぞれの世界へ帰りゆく。<sup>24)</sup>

この小説に描かれる社会は富豪階層と貧民階層に二分され、社会の定めた掟がその二つの階層に適用されている。Jennie は心の優しい、おおらかな娘であり、貧しい一家を救うためにだけ Brander にも Lester にも近づいたのであるが、社会の掟より見た場合には一度ならず二度までも墮落し、私生児を生んだ女という事になり、Jennie も時折その生涯は失敗であったと考えている。<sup>25)</sup> しかし社会の因習にとらわれる度合は貧しい人々よりも社会の実権を握っている金持のほうが強く、富豪の出身である Lester もその掟に反発を感じながらも捕らえられているので、Jennie に対して優柔不断な態度をとっている。Lester は富豪の生活圏より飛び出してみたものの、外の世界では生きてゆけないのを知り、家族が祝福する結婚、即ち同じ階層の Letty Gerald と結婚し Jennie を捨てる。<sup>26)</sup>

Dreiser は Jennie と対照的に社会の因習に捕らえられた Lester を通して決定論を展開し、世界は人間の意志と無関係に進み、人間はその歩みを止める事も変える事も出来ないと言張する。

Why should he complain, why worry, why speculate?—the world was going steadily forward of its own volition, whether he would or no. Truly it was.

And was there any need for him to disturb himself about it? There was not. He fancied at times that it might as well never have been started at all. "The one divine, far-off event," of the poet did not appeal to him as having any basis in fact (pp. 404-405).

Lester は死の床で Jennie と別れたのを後悔していると告白するが、これは Lester の人生観、世界観の転回を意味するのではなく、Jennie と別れてから以後 Jennie と生活した程幸せでなく、いかに深く Jennie を愛していたかを知ったという単純な理由からの告白である。<sup>29)</sup> このように Lester を通して表明した Dreiser の決定論は *Sister Carrie* の二番煎じであり、Carrie や Hurstwood を通して Dreiser が主張した時の新鮮さもなければ、迫力もないように思われる。

#### 4. 絶 対 者 の 存 在

Dreiser の決定論と並行し、対立して万物を統一し、超越する絶対者の追求が Jennie<sup>28)</sup> を通して開始されるが、Dreiser はその前提として利潤追求に狂奔する資本主義社会の中でただ一人、Jennie をおおらかな自然児として描き、他者に惜しみなく与え、他者のために心身を犠牲にする利他主義を Jennie に具象化している。<sup>29)</sup> Dreiser は Jennie の世界を所有を主張する者の存在しない世界と規定し、そのような世界は資本主義社会においては例外であり、変種であると指摘している。

Life, so long as they endure it, is a true wonderland, a thing of infinite beauty, which could they but wander into it wonderingly, would be heaven enough. Opening their eyes, they see a conformable and perfect world. Trees, flowers, the world of sound and the world of color. These are the valued inheritance of their state. If no one said to them "Mine," they would wander radiantly forth, singing the song which all the earth may some day hope to hear. It is the song of goodness (p. 15).

この例外であり、変種である Jennie において始めて貧困と美とが結合している。Dreiser は *Sister Carrie* において金を持つのを成功と考え、美とするアメリカの価値観を追求したが、この小説においても Brander や Lester などを通して金持である事の心地良さを十分に描いているが、他方貧しいとはどのような事か、貧しき者の辛い生活のみでなく、貧しき者のみが持つ誠実でおおらかな性格をも描いている。

She went away, and in a half reverie he closed the door behind her. The interest that he felt in these people was unusual. Poverty and beauty certainly made up an affecting combination. He sat down in his chair and gave himself over to the pleasant speculations which her coming had aroused. Why should he not help them? (p. 23).

Brander も Lester も Jennie とは別の世界の富豪階層の人間であり、その世界に不満を感

じているだけに Jennie に強く引かれている。正式に結婚する前に Brander は急死し、Jennie は私生児となった Vesta を出産するが、社会の掟を犯したという非難に Jennie はそれ程心を痛めていない。社会の掟よりも大きな自然の掟が Jennie の存在と行動とを規定している。

Jennie の行動を規定する自然の掟に逆い、Vesta の存在を秘して Lester と New York へ旅立った Jennie にとり New York での生活が物質的には恵まれていても心の安らぎがえられるはずもなく、やがて Vesta が重い病気に罹ったと知り、Lester にすべてを告白して裁断を待つ。Lester は別れもせず、正式な結婚もしない不安な状態で、Jennie を取るか Kane 家の財産を取るか選択を迫られている最中にヨーロッパ旅行へ出発する。

このヨーロッパ旅行は *Jennie Gerhardt* の構成上きわめて重要な出来事で、Jennie と Lester とが各々の生活圏より飛び出し、共に生活してきた前半と対照的にそれぞれ本来の世界に帰りゆく契機となっており、小説の前半と後半とを分かっている。この旅行において Jennie は世界はいかに広いものであるか、それに比べれば個人の苦しみ悩みなどは取るに足りぬものであり、周囲の人々がいかに罵ろうとも悠々たる時の流れの前ではむなしい。<sup>30)</sup> このはかない現象を超越し、永遠に存在するのは善、心の善良さ以外にはないと悟る。

Admitting that she had been bad—locally it was important, perhaps, but in the sum of civilization, in the sum of big forces, what did it all amount to? They would be dead after a little while, she and Lester and all these people. Did anything matter except goodness—goodness of heart? What else was there that was real? (p. 306).

Dreiser は所有しないという Jennie の特質を窮極まで追求して Jennie よりすべてを奪っている。貧しさのなかで協力し助けあった母の死に続いて、Gerhardt の死、Lester も去り、唯一の生きる目標となった Vesta さえも Jennie より奪っている。生きる目的が全くなくなっても Jennie は Hurstwood のように自ら命を断つわけでもなく、なお生きる目標を求め、二人の孤児を育てるのに意義を見出す。Dreiser はこの Jennie を通して不可知論のアンチテーゼである絶対者の存在を暗示して、Lester を通して示した不可知論と対照する事により鮮烈な印象を与えようとしている。

Jennie, living on the South Side with her adopted child, Rose Perpetua, was of no fixed conclusion as to the meaning of life. She had not the incisive reasoning capacity of either Mr. or Mrs. Lester Kane. She had seen a great deal, suffered a great deal, and had read some in a desultory way. Her mind had never grasped the nature and character of specialized knowledge. History, physics, chemistry, botany, geology, and sociology were not fixed departments in her brain as they were in Lester's and Letty's. Instead there was the feeling that the world moved in some strange, unstable way. Apparently no one knew clearly what it was all about. People were born and died. Some believed that the world had been made six thousand years before; some that it was millions of years old. Was it all blind chance or was there some guiding intelligence—a God? Almost in spite of herself she felt there must be something—a higher power which produced all the beautiful

things—the flowers, the stars, the trees, the grass. Nature was so beautiful! If at times life seemed cruel, yet this beauty still persisted. The thought comforted her; she fed upon it in her hours of secret loneliness (p. 405).

ここにおいて Dreiser の決定論は分裂し、一方において人間は環境に支配されいかに脆いものであるかを示しながら、他方ではその境遇を超越する絶対者を肯定している。Dreiser の思想が分裂したのを反映して plot も分裂し、貧しい境遇に弄れる Jennie を描くのに熱中し、人間は将棋のこまのように環境に支配されていると主張するが、途中で思い出したようにそのこまを動かす源に言及している。しかしこの思想は具象化されずに Dreiser の生の声として登場するにすぎないが、*Jennie Gerhardt* において始めて決定論と対照をなす思想が表明されたのである。

本稿を草するに当り、日頃御指導賜わっている宮城教育大学横沢四郎教授、東北学院大学フィリップ・ウィリアムズ教授に対しまして、深甚の謝意を表します。

#### 註

本稿は昭和48年10月、東北英文学会において口頭発表したのを敷衍したものである。

- 1) Cf. Rod W. Horton & Herbert W. Edwards, *Backgrounds of American Literary Thought*, 「アメリカ文学思想の背景」(東京, 1972), 関口功, 白石佑光共訳。
- 2) Charles Child Walcutt, *American Literary Naturalism, A Divided Stream* (Minneapolis, 1956), p. 221.
- 3) Theodore Dreiser, *The Bulwark* (New York, 1946), p. 317.
- 4) Robert H. Elias は *Theodore Dreiser : Apostle of Nature* (Ithaca and London, 1970) において、この建築技師が Drouet のモデルであると指摘して次のように語っている。“For the architect he substituted the traveling salesman Drouet, the kind who had intrigued more than one of his sisters.” (pp. 106-107).
- 5) Elias は Dreiser が *Sister Carrie* を書くのに最も苦慮したのは、この小説の持つ二重の性格をどのように取扱うかであったと語っている。“On the one hand he regarded all struggle as fundamentally futile; or the other he could not reconcile himself to the prospect of failure. Carrie represents the boyhood Dreiser, who has illusions about the outside world, follows dreams, and never realizes them. Hurstwood, unable to extricate himself from disasters, is the realization of the boyhood Dreiser’s fears. Carrie is what Dreiser had been and now as sentimentally blind; Hurstwood is what he hoped he might never be. While Carrie’s career argues the impossibility of realizing one’s dreams, Hurstwood’s illustrates the horror of a life in which all dreams have been abandoned” (*Ibid.*, p. 109).
- 6) *Sister Carrie* において Dreiser は次のような見解を表明したと Walcutt は指摘している。“In the first stage Dreiser was expounding his conviction of the essential purposelessness of life and attacking the conventional ethical codes which to him seemed to hold men to standards of conduct that had no rational basis in fact, while they condemned others without regard to what Dreiser thought might be the real merits of their situations.” (*op. cit.*, p. 187).
- 7) Cf. Theodore Dreiser, *op. cit.*, pp. 317-319.
- 8) F. O. Matthiessen は、Warsaw は Dreiser にとって牧歌的で美しい田園を意味するのみでなく、母と結びついた思い出の多い、なつかしい土地であったと指摘する。“But over this span of the years his heart reverted happily to Warsaw, to an idyllic picture of its tall sycamores and fragrant hayfields, its nearby lakes and woods. More than any other place this little town meant his mother to him, for here he first came partially to understand her, to view her as

- a woman and to know how remarkable she was . . . I really adored her.'” (*Theodore Dreiser*, New York, 1951, p. 16).
- 9) Cf. *An American Tragedy*. (New York, 1925 ; Cleveland and New York, 1962) PP. 527-528, p. 596.
- 10) Richard Lehan は *Theodore Dreiser : His World And His Novels* (Carbondale & Edwardsville, 1969) において、Dreiser は Ames を理想の人物として描いていると語っている。“Carrie is intuitively attracted toward the beautiful, a point the critics of *Sister Carrie* miss, and the personification of this higher kind of ideal is Ames, a “genius” from Indiana, who Dreiser obviously models, at least in part, on himself.” (p. 69).
- 11) Theodore Dreiser, *Sister Carrie* (New York, 1900; Ohio, 1969, p. 357).
- 12) Walcutt はこの小説の構成は Carrie と Hurstwood の二人の “life cycle” より成立すると考えている。“Having deprived his novel of the conventional structure, Dreiser supplies the two cycles—Carrie’s rise and Hurstwood’s descent. These two cycles embody the principle of change which Dreiser finds fundamental to all life and all natural process.” (*op. cit.*, pp. 191-192) しかし Carrie の上昇の cycle と Hurstwood の下降の cycle を横切る Drouet の直線を考慮に入れるならば両者の浮き沈みが一層鮮明になるように思える。Lehan は Drouet をこの小説の重要な人物と看し、次のように語っている。“In fact, Dreiser established a mechanical relationship among his characters; the other characters seem to be measured against Drouet, who is one static and unchanging person in the novel” (*op. cit.*, p. 69).
- 13) Philip L. Gerber は Hurstwood が何故に Carrie に魅惑されたかを Dreiser は納得のゆくように説明していないと指摘する。“But why—granting the fresh contrast of her beauty with his wife’s shrewishness—this untutored country girl with scarcely an idea in her head should so captivate a man of Hurstwood’s polish and experience is never satisfactorily explained. Dreiser does not attempt it—he simply informs us it is so. Perhaps he is wise not to try.” (*Theodore Dreiser*, New York, 1964, p. 57). Matthiessen はそれを Carrie の優しい情感に求めている。“Dreiser also emphasizes that she feels ‘the constant drag to something better.’ This is suggested initially in her gradual realization that she possesses an emotional depth quite beyond the scope of the genial but egotistic drummer. Hurstwood is drawn to her by something more tender and appealing than he has found in any other women.” (*op. cit.*, p. 70).
- 14) Dreiser の “katastates” という語の使用に関して Walcutt は次のように説明している。  
“A consciously scientific use of detail appears when Dreiser brings chemical physiology to the explanation of Hurstwood’s mental condition as he is beginning his final downward plunge:” (*op. cit.*, p. 190).
- 15) Charles Shapiro は *Theodore Dreiser : Our Bitter Patriot* (Carbondale, 1962) において Hurstwood の破滅の原因を三つの要素に分けて考察している。“And we are similarly reminded of the reasons for Hurstwood’s fall : chance, material conceit, and his love for Carrie, the three elements which can be symbolically transferred as properties of America. These elements in their large context would be : problematic changes of fortune, the worship of false values, and the inevitable seduction of the imaginative consciousness by values opposed to a gross materialism, values which might not, in themselves, hold true.” (p. 7).
- 16) 「Carrie の虚ろな満されぬ姿」に関して Lehan は次のように語っている。“Carrie, like all of Dreiser’s characters, feels that time will bring complete fulfillment which in reality it will bring only death. A second voice is heard here, as we hear it often in this novel, a voice of cruel irony that reveals the gulf between what Carrie expects to happen and what will really happen.” (*op. cit.* p. 79).

- 17) *Sister Carrie* は最初アメリカより英国において好評を博した。Cf. Gerber, *Theodore Dreiser*, p. 76.
- 18) Dreiser は1901年2月までに *Jennie Gerhardt* の草稿を10章まで書き、題名を *The Transgressor* と名づけていたが、1902年憂鬱症となり筆を断ったが、1904年、先の manuscript を捨てて再び書き、41章まで書いた。1910年14章より書き改め、1911年に完成した。
- 19) Shapiro はアメリカの子供達は家庭と家庭の外の世界との価値観があまりにも異なるので家庭より離散する傾向があると指摘する。“Self-centered, conniving but for the most part honest, the children struggle between an allegiance to the family and the powerful pull of standards set up by the outside world, standards which are at constant odds with hearthside preachings. The compromise reached is to face family disasters with a ‘Well, I wouldn’t worry about it... we’ll get along somehow’ attitude.” (*op. cit.*, p. 16).
- 20) Theodore Dreiser, *Jennie Gerhardt* (New York, 1911; Cleveland and New York, 1926), p. 245.
- 21) Theodore Dreiser, *op. cit.*, p. 317.
- 22) Theodore Dreiser, *ibid.*, p. 317.
- 23) Cf. The presence of the child in the house might be the cause of recurring spells of depression and unkind words, but there would be another and greater influence restraining him. These would always be her soul to consider. He would never again be utterly unconscious of her soul (p. 124).
- 24) Elias は、Dreiser が Lester と Jennie を結婚させなかったのは、物語に “poignancy” を与える効果を狙ったためであると語っている。“In fact, Lester’s not marrying Jennie and the death of Jennie’s child were incidents Dreiser had to contrive in revising his novel, to give the story a ‘poignancy’ which the original tone demanded but which he had not been able to maintain.” (*op. cit.*, p. 154).
- 25) Cf. The old hopeless feeling came over her that her life was a failure. It couldn’t be made right, or, if it could, it wouldn’t be. Lester was not inclined to marry her and put her right (pp. 265-266).
- 26) Walcutt は Lester を全面的に非難出来ないと主張する。“The reader cannot entirely blame Lester when he finally gives Jennie up, for he understands the many subtle pressures—which Dreiser so fully presents—that condition his exercise of volition.” (p. 195).
- 27) Cf. “I’ve always wanted to say to you, Jennie,” he went on, “that I haven’t been satisfied with the way we parted. It wasn’t the right thing, after all. I haven’t been any happier. I’m sorry. I wish now, for my own peace of mind, that I hadn’t done it.” (p. 442).
- 28) Lehan は最初の草稿では Jennie は粗野で淫らな女であり、金銭に執着するところがあったが、改定の結果自然を愛する無垢な女性になったと語り、この Jennie の創造により *Jennie Gerhardt* は *The Bulwark* へ一步接近したと指摘する。“Jennie has a ‘poetic soul,’ to use Dreiser’s own words, and in one sense she begins where Carrie leaves off, becomes what Carrie aspires to become. She tries to release the spirit from the flesh..., and *Jennie Gerhardt* looks back to *Sister Carrie* and forward to *The Bulwark*.” (*op. cit.*, p. 86).
- 29) Dreiser はこの小説において性と自然の働きとを相等しく描いていると Lehan は語っている。“Through descriptive detail, Dreiser equates sex with the very workings of nature. After Jennie becomes pregnant with the senator’s child, Dreiser breaks into a long, lyric passage in which he compares the spirit of youth and the spirit of nature. As nature realizes itself in the spring and the summer of the year, so youth realizes itself through sex.” (*Ibid.*, pp. 94-95).
- 30) Dreiser は Jennie を罪深い女と見る世間の掟を嘆いていると Walcutt は指摘する。“He denies that she is sinful; he deplores the moral codes which, failing to restrain her first slip,



inflict a consciousness of guilt upon her ever after ; he considers her good and beautiful, and the reader is led to conclude that Lester Kane was foolish (or very unlucky) not to have married her.” (*op cit.* d. 198).

## The Development of Theodore Dreiser's Novels— The Road to *The Bulwark* (1) —

Kimiko HOMMA

Theodore Dreiser, who has been described as a naturalist, reveals the pessimistic view that there is no purpose in life and how helpless a human being is in the world. But “even while he was writing his early books he believed in a mystical Cosmic Consciousness that one would hardly have suspected from reading these books,”<sup>1)</sup> says Charles Child Walcutt. Dreiser is indeed disposed to turn from materialism to spiritualism, from naturalism to mysticism. He seems to have believed in “a Creative Divinity,” when he wrote that “there must be a Creative Divinity, and so a purpose, behind all of this variety and beauty and tragedy of life”<sup>2)</sup> in *The Bulwark*.

Solon Barnes believed in “a Creative Divinity” when he was taking a walk in the beautiful garden. In his works Dreiser suggests mystical existence in the description of nature. *Sister Carrie*, however, begins with the scene in which Carrie leaves her native town, Columbia City, where people converse with nature, for Chicago, one of the greatest cities at that time, which means that Dreiser rejects to admit a higher power beyond natural phenomena. He maintains both the purposelessness of life and human dignity through Hurstwood's striving against fate. Toward the end of this novel Carrie wins applause as an actress. But when he describes Carrie being driven by her cravings in contrast with Hurstwood keeping his dignity, Dreiser himself seems not to be satisfied with such pessimistic view as he reveals in this novel.

In Dreiser's next novel, *Jennie Gerhardt* there is a touch of irony in Gerhardt's experience that his beloved daughter, Jennie strays from the path of righteousness while other children, though selfish, do not sin. There is such a parallel point in Gerhardt's experience and Solon's that *Jennie Gerhardt* steps up to *The Bulwark*. On the one hand Dreiser reveals his determinism when he tells us that “we're moved about like chessmen by circumstances over which we have no control”<sup>3)</sup>; on the other he admits “a higher power which produced all the beautiful things—the flowers, the stars, the stars, the trees, the grass.”<sup>4)</sup> It seems to be important for Dreiser to have admitted “a higher power” by which he seems to suggest “a Creative Divinity” in *Jennie Gerhardt*.

1. Charles Child Walcutt, *American Literary Naturalism, A Divided Stream* (Minneapolis, 1956), p. 180.
2. Theodore Dreiser, *The Bulwark* (New York, 1946), p. 317.
3. Theodore Dreiser, *Jennie Gerhardt* (New York, 1911; Cleveland and New York, 1926), p. 401.
4. *Ibid.*, p. 405.